

氏名	ヒラ ハラ	平 原 なつこ
学位の種類		博士 (美術)
学位記番号		博 美 第 252 号
学位授与年月日		平成 21 年 3 月 25 日
学位論文等題目		〈作品〉 ruah-カーテン-、 ruah-風-、燃える柴 〈論文〉キリスト教精神を象る美術と自己の作品
論文等審査委員		
(主査)	東京芸術大学	教 授 (美術学部) 米 林 雄 一
(論文第 1 副査)	〃	〃 (〃) 佐 藤 道 信
(作品第 1 副査)	〃	〃 (〃) 深 井 隆
(副査)	〃	〃 (〃) 北 郷 悟

(論文内容の要旨)

本論文は、キリスト教精神を象るということが、いかなることなのかという視点から書かれている。キリスト教はユダヤ教の一派として始まって現在に至っており、ユダヤ教の聖典である旧約聖書、そして新約聖書を聖典としている。

旧約聖書の創世記20章4節には「あなたは、いかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水のなかにある、いかなるものの形も造ってはならない」という記述がある。この律法は、キリスト教美術の発生から、聖像破壊運動、宗教改革にまで関わっている。

キリスト教は、長い歴史のなかで宗教改革という大きな出来事を経験し、カトリックとプロテスタントという2つの流れを生み出した。

私自身も作品を制作する上で、この偶像と旧約聖書の創世記20章4節についての解釈を、常に問いかけべき問題として意識してきた。現在生きている私が、どのようにその問いに答えをみだし得るかは分からないが、私にとっては、自己の制作における立ち位置を見つけるための重要な問いである。

本論は以下の4章から成っている。

第一章では、自己のものを象ることの意味と生きることの意味について、また作品制作における象徴の重要性から、旧約聖書における人と神との契約によって生じる象徴性について、並びに人間の欲する象徴性と偶像について考察する。これは、人間と神の直接的な関わり合いが、どのように象徴を生み出し、許容されていたのか、神の価値観を聖書の記述から読み解く。これらを通して自己の作品制作における象徴性の理想的モデルとしての学びにつながることを期待する。そして上述した創世記20章4節についての考えをまとめた。

第二章では、過去、キリスト教美術の様式化がはじまったロマネスク様式、ゴシック様式のなかで生まれた像をとりあげる。宗教改革以降、20世紀に生きた作家エルンスト・バルラハの人生と作品から考察する。これは今を生きる私にとって、必要な資料として重要である。エルンスト・バルラハ(1870～1938)は、激動の時代において迫害を受けても、屈せずに作品制作に挑んだ。その人生の歩みとともに作品について考察したい。

第三章においては、自己とキリスト教への理解が作品を通してどのように進んでいったのか、過去に自分がどのように考え、そして制作したかを時間をおってまとめていきたいと思う。その考えは時として次の作品に引き継がれ、またある時には、違う内容を題材に制作している。過去の有りようであった作品は、現在の自分と作品を繋いで意味付けしている。自分の作品であっても、振り返る時に初めて自

分が何を意図していたのかを冷静に、あるいは他者のように共感するといった間隙が生まれてくる。

まず、制作当時の考え、制作の背景を回顧し、当時の自分が課題として次の自分に残したものを、現在の自分がどのように受け止めたのかを論じる。その応答が未熟であり一部分であると感じた場合、今後の課題としてその点を記述する。

第四章では、提出作品について論じた。

この論文をまとめることにより気がついたことは、起点と終点が今に帰着しているという点である。過去も将来もこの今が結んでいる。今の自分が何を模索し、何を探求しようとしているかに依っているのである。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、熱心なキリスト者であり、また美術の造形家でもある筆者が、偶像崇拝を禁じた教義との間で逡巡し苦悩しながら、自らの制作と作品の意味を論考した労作となっている。

筆者にとって、『旧約聖書』の「創世記」20章4節にある次の一文（「十戒」の一つ）は、造形者としての自身をゆるがす難題として立ちはだかつてきた。「あなたは、いかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水のなかにある、いかなるものの形も造ってはならない」。ではなぜ宗教美術が存在するのか。筆者はロマネスク美術やゴシック美術、そして20世紀に生きたエルンスト・バルラハの作品を通じて、それらが偶像ではなく、象られた信仰、信仰のかたちとしてあることに思い至る。作家たちは祈りを刻み、かたちにしたのである。ここから筆者は、聖書に取材し、祈りをかたちにすべく、「一粒の麦」「風」「繁る」「カリタス」「海の歌」「ruah (ルアハ)」「sound of voice」「ground of being」「mother」「記念」「苦しみにも 痛みにも 希望にも似て」といった作品を、次々に制作していく。

なかでも、提出作品のタイトルにも使った「ruah (ルアハ)」は、筆者にとって特別な意味をもっている。「ruah」は、ヘブライ語で風、また神の息、聖霊という意味をもつという。風に吹かれてゆらぎ、たなびく草や炎やカーテンは、神の存在を受けとめる筆者自身の姿であり、象られた筆者の信仰でもある。

強いモチベーションとリアリティに支えられた熱い文章は、筆者にとって信仰と祈りこそが、制作の源であることを示して余りあるものになっている。多分に信仰の書ともいべき内容が、論文としてどうかという言及もあったが、むしろ不可分の制作のモチベーションと、自らの存在を根源から問うた意欲作として、学位にふさわしい論文として評価された。

(作品審査結果の要旨)

平原なつこの三点の提出作品はいずれも木を素材にし、彩色された彫刻である。

「ruah-カーテン」は三点の中で一番大作である。樟を寄木し一枚のカーテンが風をはらんで大きくゆれている姿を形にしている。「神からの息吹」を受けている自己をカーテンにイメージしているようだが、青く彩色されたカーテンは空の青さを反映しているようであり、円形にあたった金色は光を感じさせる。

「ruah-風-」は円形の台（大地をイメージ）から生じた風になびく草（植物）を表現している。風はかなり強く吹き草原を力強く渡っていく。そこにあるエネルギーを作者は神のエネルギーと感じている。色彩は多く使われていて、色も動きを表現している。

「燃える柴」は炎のイメージが強い。小品ではあるが、燃えているエネルギーを発散しているかのようである。色彩も赤を中心にしてあり「燃える」姿を表現している、

平原の作品は、論文の題名にあるように「キリスト教の精神」から、形にしたものである。しかしキ

リストの像や聖人たちの像など、キリスト教を示唆する形は現れてこない。一般的なキリスト教美術と一線を画している。作者が論文に書くように「偶像」の問題もそこにはあるのだろうが、なによりも作者が聖書から感じるイメージを形にしていることが大きい。このような抽象化された「キリスト教」美術はあまり無いものであり、今後の新しい彫刻の表現の可能性を開いている。また、その作品は重さ、量感といった一般的な彫刻の概念から離れ、軽快で自由に、色彩豊かに表現されている。空気の動き、風、それに伴う精神の揺らめきを感じさせる。自身の信念を持って新しいアート表現に臨む姿勢は大いに今後に期待が持てる。

(総合審査結果の要旨)

平原なつこは、木彫制作を通じて彫刻作品と本論文を提出した。彫刻作品は「ruahー風ー」を提出し、論文、第一章 ものを象ることと象徴、第二章 象られた信仰ー象徴としてのキリスト、第三章 自己の表現について、第四章 提出作品「ruahーカーテンー」、結び、の章立てで論述している。

キリスト教精神を象るといことがいかなることなのかという視点から論じようと努め、ひたむきで正攻法な展開となっている。申請者自身は礼拝に欠かさず出かける敬虔な信者でもあり、自己の内面をみつめながら、信仰と創造について両面から考察を深めている。

キリスト教精神を象る美術については、過去の事例からロマネスク美術、ゴシック美術、さらに信仰と苦悩の彫刻家エルンスト・バルラハを取り上げ、自己の制作と対照しながら創造のイメージーションを進め研究してきた。

表現方法はアブストラクトを基礎として自身が感じる神の存在や啓示を具現化しようと試みながら、創造との在り方を模索している。本論文は他に類を見ない興味深い視点であり、一個人の問題にとどまらず広がりのある論文といえる。作品と論文から充分課程博士論文として評価され、合格と判定される。